

〔研究ノート〕

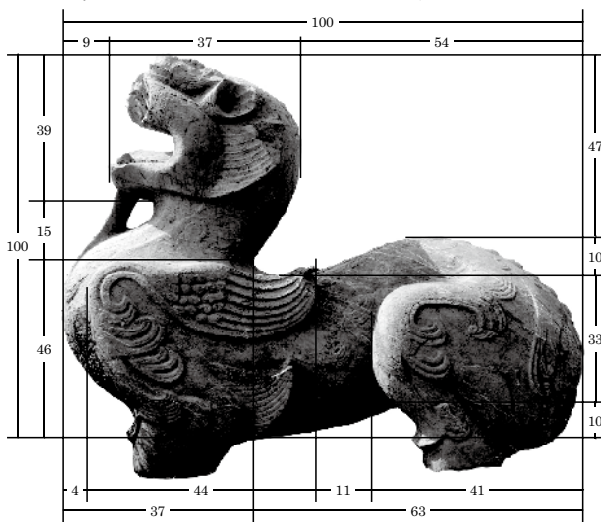
南京・丹陽南朝陵墓有角石獸調査報告（2）

山 本 謙 治

5. 陵口右石獸

1) 体軀(プロポーション)〔図5-1・2・3・4〕

体長3.95m。陵口石獸の基本造形比率は獅子衝石獸に等しい（調査報告(1)表2参照）。ただ②頸長〈顎下—顎下〉が獅子衝石獸12から陵口石獸15へと長くなったことと、⑧翼幅〈翼前—翼後〉が獅子衝石獸41から陵口石獸44へと広がった点が両者の相違である。㊤グループの石獸のなかで、頭部・胸部・胴部・臀部のバランスがもっとも安定し、造形的に破綻のないのは陵口石獸と三城巷南石獸である。獅子衝石獸は頭でっかちで前半身のつまった印象を与えたが、その原因は頸の短さと翼の小ささにあった。陵口石獸ではこの点が解消されたことと、実際の大きさが獅子衝よりもひとまわり大きいという量感によって、がっしりと安定した印象を与えるプロポーションとなった。



陵口右石獸造形比率

2) 頭部〔図5-5・6・7・8・9〕

頭部は正面斜め上方を向いて口を開く。頭頂部中央に1本の角の痕跡が残るが、角は破損する。正面は上顎より上部の表面を欠損し、鼻の右側のみが残存する。左側面は上顎口唇部、耳先端、頬髭先端、眉上部が欠損する。右側面は目が破損し、上顎先端部と眉上半分、耳と頬髭先端が欠損する。

(1)角〔図5-6・7〕

両目の間の隆起部の上に1本の角の痕跡が残る。頭頂および頸背には角の痕跡は見られず、後頭部に小さな楕円形の痕跡がわずかに残る。《左石獸》が2本の角を頭部より分離して作っていた点から判断して、《右石獸》も角を頭部より分離して作っていたものと思われる。

(2)目

両目とも破損する。

(3)眉〔図5-8・9〕

〈左眉〉は下半分のみ残存し、上半分と先端を欠損するため形は不明。残存部は幅の狭い段彫り。〈右眉〉は破損する。

(4)耳〔図5-8・9〕

〈右耳〉は後方45度に倒した楕円形で、基部を二段に彫出す。内部を彫り窪め、後方部には中心より輪郭部に繋がる3本の稜線を彫り出す。先端が欠損する。〈左耳〉は耳の穴のみが残り耳介は破損する。

(5)口吻

(a)鼻〔図5-5〕

鼻先は上顎の先端と同一面にあるが、上顎と共に欠損し、わずかに左鼻孔のみ残存する。

(b)口唇 [図5-8・9・10]

口唇は上顎正面と左上顎上部を欠損する。下顎から上顎まで口唇はひと続きとなる。口端から上顎の口唇は太く盛り上げるが、口唇内には、下顎正面以外には線刻は施していない。下顎正面には両端から1本の刻線がのび、中央で向かい合わせに下向きに渦を巻く。

(c)歯 [図5-5・8・8・10]

歯は〈左下顎〉のみ明瞭に残存する。左端に牙の付け根がわずかに残り、それより口奥まで9本程度の小さな白歯が彫られる。下顎中央に三角形に隆起した舌の一部が残る。

(6)頬髭 [図5-8・9]

〈左頬髭〉は口端口唇の後方に10枚段彫りする。毛筋は並行線で集束しない。その下端は下顎の付け根から発し、上端は耳の付け根から発する。輪郭からすると先端はかなり上方へとはね上がるようであるが、先端は欠損する。〈右頬髭〉も同形であるが、風化のため表面は判然とせず、先端半分が欠損する。

(7)顎髭 [図5-10]

下顎前面の下部からのびる顎髭は幅が広く、浅い刻線で12本の平状毛筋をつくり、わずかに幅を絞ったのち、前胸部にいたって3段6条に分かれて広がる。顎髭と喉元との間は彫り抜く。

(8)頭部体毛 [図5-7]

後頭部から頸背にかけては、後頭部中央部より左右に2本、頸背中央部より左右に1本の体毛がつくられるが、左側表面は風化のためほとんど判然としない。

〈右側面〉の後頭部には、中央の角と頬髭の間に2本の体毛が彫られる。上方の体毛は、角の痕跡部と右頬髭先端の間にあつて、短く彫られる。輪郭や毛筋は風化のため判然としない。下方の体毛は、後頭部中程から発して、先端は曲線を描き右頬髭下部の輪郭に接する。体毛には2本の毛筋を線刻する。〈右側面〉後頭部も同様と思われるが、風化のため確認し難い。

3) 頸部 [図5-11]

〈右側面〉では、頸背中央から頸側肩口にかけて上向きの曲線を描いて体毛をつくる。先端は上方に向かって反転し二重の渦を巻く。体毛には2本の毛筋を線刻する。この体毛と後頭部下方の体毛との間には、頸背の体毛を発する個所に、下向きにひと巻きする小さな体毛をはさむ。〈左側面〉も同様であるが、先端の渦巻き部分以外は風化のため確認し難い。

4) 前胸部 [図5-12・13・14]

下顎中央からのびてきた顎髭が上下3段左右6条に分かれて広がる。左右ともに、上段と下段の体毛が長く、中段は上下段よりも短い。〈左側面〉の体毛3本は、いずれも最先端のみが小さく上方に巻き込み、上中段一重、下段二重の渦を巻く。毛筋は4本の深い刻線で5本彫り出すが、上中段は刻線が風化し紐状に陽刻したように見える。

〈右側面〉の体毛も同様であるが、3本とも先端が巻き込むのではなく、上方に反転して半C字形をつくるにとどまる。上段の毛筋は太く3本を陽刻して、そのなかに各1本の刻線を入れる。中段は3本、下段は5本の深い刻線をいれ、各4本、6本の毛筋をつくる。

5) 脚部 [図5-15・16]

前後脚4本とも体部以下にでる部分は欠損する。左前脚の肘以下の角度から判断すると、左脚を前に踏み出していたように思われる。〈左前脚〉の残存部では、肘を頂点として逆くの字形に後側面1/3を一段低く彫り臑を表す。

〈左右前脚〉の肘後には三角形の長毛をつくる。〈左脚長毛〉は完存する。先端は45度程度上方へ向き、14本の刻線により毛筋をつくる。刻線は中央10本が並行し、上下は集束する。〈右脚長毛〉も同様であるが、先端が欠損し、表面は風化のため毛筋は判然としない。〈左右後脚〉は体部の付け根部分から欠損するため、長毛は確認できない。

6) 上腕部 [図5-17・18]

〈左上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび(①)、その先端は2つに分岐する。ひとつは前方に短く



図 5-1



図 5-2



図 5-5



図 5-3



図 5-4

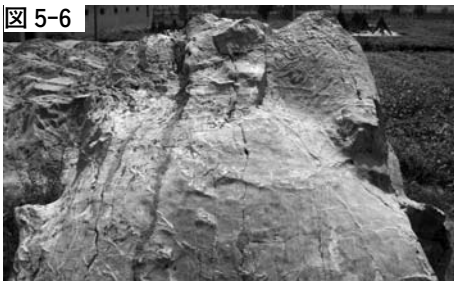


図 5-6



図 5-7



図 5-10



図 5-8



図 5-9



図 5-11



図 5-14



図 5-12



図 5-13

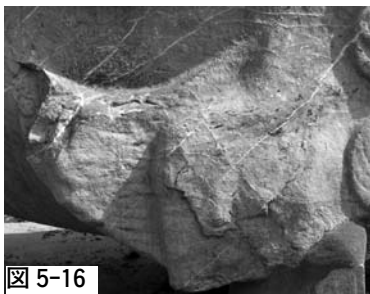


図 5-16



図 5-15

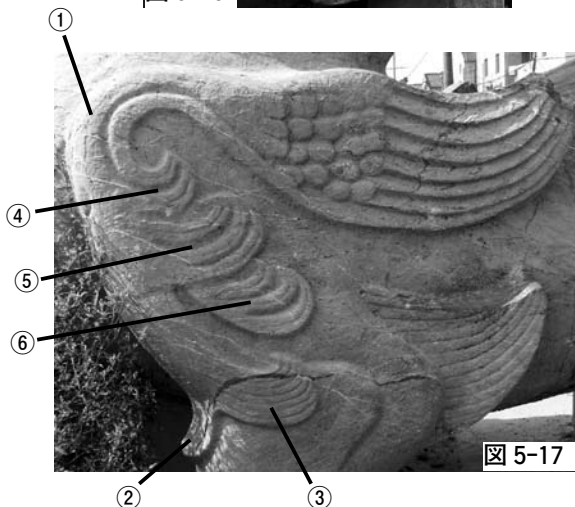


図 5-17

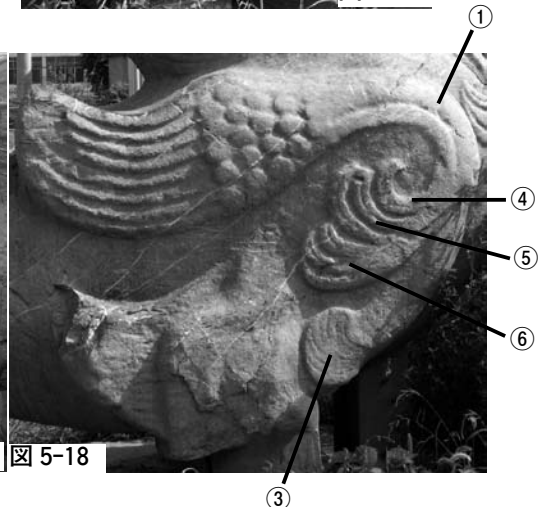


図 5-18



図 5-19



図 5-20

反り返り（②）、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する（③）。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって三つに分岐する（④～⑥）。体毛①は④の付け根部分から翼基部にかけて1本の太い刻線をいれて外郭をつくる。体毛①より分岐した③は幅が広く、毛筋は7本の刻線を並行に施し、上方の先端は前方に向かって半C字形に小さく反転する。3つに分岐した体毛のうち④と⑤は①から発し、⑥は⑤の下部から発する。④～⑥いずれも幅が広く、上方の先端は前方に向かって半C字形に反転する。体毛輪郭内部は、④は1本の太い刻線で毛筋を2本に、⑤⑥は2本の太い刻線で毛筋を3本に大別し、それぞれそのなかに細い刻線を1本施し、さらに毛筋をつくる。

〈右上腕部〉の体毛も同様の形式であるが、②は欠損する。③は9本の刻線で毛筋をつくるが、付け根部分の表面は風化する。体毛輪郭内部は、④は細い刻線のみしかなく、⑤は1本の太い刻線で毛筋を2本に、⑥は2本の太い刻線で毛筋を3本に大別する。⑤と⑥の上2本にはさらに細い刻線を1本施す。③～⑥は体毛の先を前方に反転させるが、先端部は左上腕部体毛ほどに鋭角的ではない。

7) 翼 [図5-19・20]

〈左翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①につながる。基部は平彫りの円形を魚鱗のように3・4・4・5・5枚と5列並べた形状である。羽は5列目の円形から8枚の段彫りで後方にのびる。羽の上部輪郭は基部から浅い弧を描いて上

方へとカーブするが、先端は欠損する。羽先の下部輪郭は勢いのあるカーブで先端に上る。羽の各段の稜線は先端にいたるにしたがい集束する。羽の最下段は翼基部の輪郭線、上腕部体毛①の輪郭線となって④の体毛に繋がる。

〈右翼〉も同形であるが、左翼と異なり、基部の円形は魚鱗状に2・3・4・5・6枚と5列並び、羽段彫りの各稜線は、先端で集束しない。先端表面は欠損する。また羽の最下段は翼基部の輪郭線とならず、上腕部体毛①の輪郭線となって④の体毛に繋がる。

8) 腹部 [図5-21・22・23]

〈左側腹〉には羽の先端にいたる手前と羽先へカーブする根元とから、後脚の間に上下2本の体毛が彫られる。いずれも表面が風化のため明確ではないが、羽先に集束する5本の縄状毛筋を彫り、先端は上向きに渦を巻く。

〈右側腹〉も同様の位置に2本の体毛が彫られるが、下の体毛は先端の渦がわずかに残るのみで輪郭は不明。上の体毛は並行する3本の縄状毛筋をつくり、先端を前方に反転して渦を巻くが、反転を開始する部分は大腿部輪郭に接して、3本の縄状毛筋とは分断されている。

下腹には性器（陰囊・陰茎・龟头）をつくる。

9) 背部 [図5-24・25]

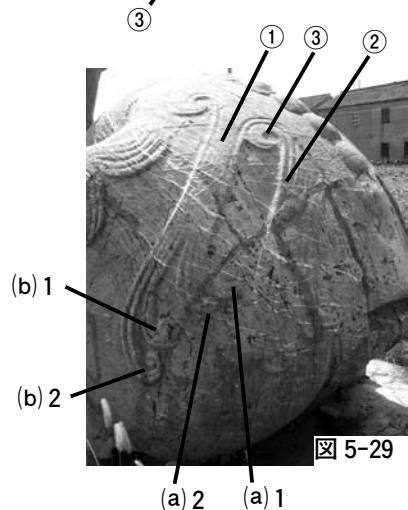
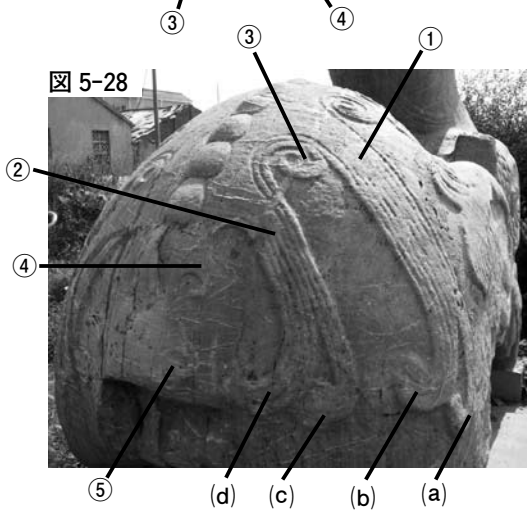
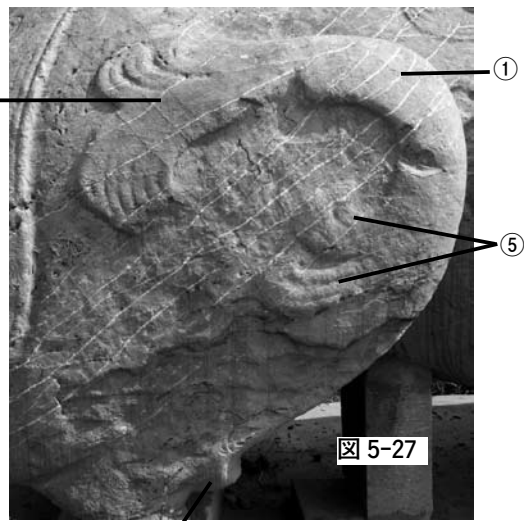
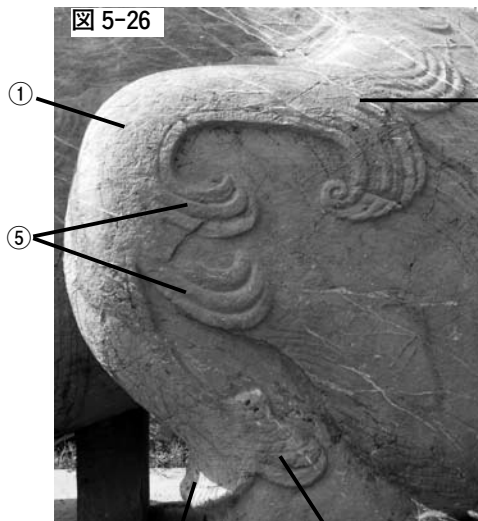
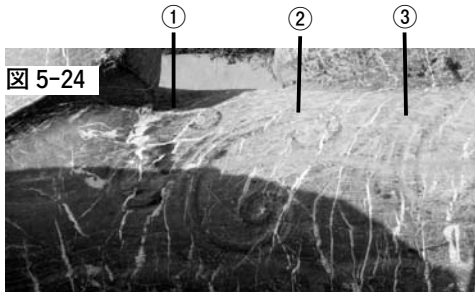
表面は風化のため判然としないが、頸の付け根から脊柱を構成する楕円形の椎骨が尾まで連続する。脊柱を中心として左右側面に、長い体毛が側腹に1本（①）、大腿部上に1本（②）後



方に向いてのびる。さらに①と肩の間には、後方に向いて短くひと巻きのびる体毛が1本(③)、①と②の間には、②の付け根に前方に短くのびる1本(④)が発する。①~④いずれも先端は上方に反転して一重の渦を巻く。

10) 大腿部〔図5-26・27〕

〈左大腿部〉の輪郭部は、幅広い带状体毛(①)で覆われる。①の上端は臀部へいたる部分で先端が上下2つに分かれる(②)。いずれも太めの刻線で上方は5本、下方は6本の毛筋



をつくる。上下ともに毛筋は並行で集束せず、先端の毛先のみが前方に反転し一重の渦を巻く。①の下端は下腿部で、ひとつは前方に短く反り返り(③)、いまひとつは体側に沿って後方へと短く分岐する(④)。④は矩形で、細い簡単な刻線で7本の毛筋を区分する。また②と④の間で、大腿部のなかに向かって①より2本の短い半C字形体毛が分岐する(⑤)。上下いずれの体毛も、毛先を上方にわずかに反転させ、太めの並行刻線で3本の毛筋をつくる。①の体毛は②から⑤、⑤から④の体毛にいたる輪郭内側に1本の刻線を入れる。

〈右大腿部〉も同様の体毛構成であるが、⑤の体毛より下の部分は欠損する。表面は風化が進んでいるが、それを考慮しても、②や⑤の部分の体毛は、〈左大腿部〉に比べて輪郭や毛筋がかなり粗雑なつくりとなっている。

11) 臀部〔図5-28・29〕

〈右臀部〉では、楕円形の椎骨を連ねた脊柱部分より、臀部中央に太く長い体毛①が、①と尾骨の間に①よりやや短い体毛②が垂れ下がる。①の基本部分(a)は細い刻線で8本の毛筋をつくり、毛先は前方(b)とそれよりも短い後方(c)の2本に分岐する。(a)(b)いずれも先端は上方に反転するが、前方(a)は半C字形、後方(b)は渦を巻く。前方体毛(a)には3本、後方体毛(b)には4本の毛筋をつくるが、反転部分の毛筋は風化して判然としない。②も同様であるが、基本部分の毛筋は7本となり、先端の反転部分は、①とは逆に、前方(c)が渦を巻き、後方(d)が半C字形となる。①と②の付け根の間には②から前方へのびて下方に一回半渦を巻く巻毛③をつくる。体毛②の付け根部分より下方には、尾椎に沿って下向きに半C字形をなす体毛④と⑤が連続する。⑤の下方は欠損するため半C字形体毛がいくつ連続していたかは不明。①と②の体毛先端より下方部分の表面は風化しており、体表がどのように処理されていたかは明らかではない。

〈左臀部〉の体毛構成も同様であるが、〈右臀部〉では①の毛先が前後(a)(b)2本に分岐していたのに対して、〈左臀部〉の①では、(a)と(b)が

それぞれさらに2つに分岐し4本になる。4本とも先端は上向きに反転し、一回転の渦を巻くが、後方(b)の渦巻き部分は風化のため判然としない。①の基部の毛筋も風化により判然としないが、前方(a)1、(a)2は太い刻線で2本の毛筋をつくる。後方(b)1、(b)2の2本も同様であるが風化により細部ははっきりしない。体毛②は基本部分は残るが先端は風化のため判然としない。①と②の付け根の間にある体毛③は、〈右臀部〉が渦巻き状であったのに対して、②から前方へのびて下方に反転する半C字形となる。①と②の体毛先端より下方部分の表面は補修されており、当初の体表装飾は不明。体毛②の付け根部分より下方は風化のため、尾椎に沿った体毛表現は残っていない。

12) 尾〔図5-28〕

尾は臀部中程下より破損する。

6. 陵口左石獸

1) 体軀(プロポーション)〔図6-1・2・3・4〕

体長4m。プロポーション、造形比率において、左右石獸には特別な差違は見られない。

2) 頭部〔図6-5・8・9〕

正面やや上方を向いて口を開く。頭部に2本の角の痕跡があるが、2本とも破損する。頭部前面の左半分は破損していたようで、目、眉、鼻、上顎、下顎、顎髭などは復元補修されている。左側面は耳先、頬髭先端を欠損するのみでよく残るが、口唇など表面の剥落部分が補修さ

図6-1



図6-2



れている。

(1)角〔図6-5・6・7〕

頭頂両目の上に2本の角をつくる。右側の立ち上がり部分のみを残し、2本とも破損するが、後頭部左右に長細い痕跡が残る。痕跡から判断して、両目の上部後方からのびた角は、一旦頭部から離れ、後頭部で接していたようである。現存する右角の表面は、前方より2段に区切られ、その中に並行する刻線を細かく施す。

(2)目〔図6-5〕

〈右目〉のみ残り、〈左目〉は後補。目は球体であるが、鼻梁側と上顎側を直角の二重線で区切られるため、1/4の球形となる。脛や瞳はなく、眼球のみがむき出され、上部から側面にかけてこれを眉が覆う。

(3)眉〔図6-8・9〕

〈右眉〉は眼球の上部と右側面を包み、U字曲線を描いて耳の上までのび、先端は欠損す

図6-3



図6-4



図6-5



図6-7



図6-6



図6-8



図6-9



る。眼球を包む表面は風化し、後方部分では細い刻線により縄状毛筋をつくる。〈左眉〉は眼球を包む部分は後補、その後方は表面が剥落する。

(4)耳 [図6-8・9]

〈左耳〉は後方30度ほどに倒した楕円形で、前方付け根部分を隆起させる。内部を彫り窪め、耳介後方部には、耳穴の中心より輪郭部に繋がる3本の稜線を彫り出す。先端が欠損する。〈右耳〉は破損し、耳穴の痕跡のみわずかに残る。

(5)口吻

(a)鼻 [図6-5]

鼻から鼻梁にかけてすべて後補。

(b)口唇 [図6-5・8・9]

口唇はひと続きではなく、上顎と下顎でふたつに分かれる。下顎口唇は、上顎口唇の上に被さるような形となる。上顎正面から左側面、下顎正面から左側面の口唇部分は後補。右側面の口端口唇は太く隆起するが、表面はかなりの面積が補修されている。

(c)歯 [図6-5・8・9]

上下顎の口内に門歯を彫り、その両端に太い牙を1本ずつ彫るが、左側上下の牙は後補で、右側の付け根のみ残る牙は当初のもの。上顎門歯は当初のものであろうが、歯数を区切る刻線は施されていない。下顎門歯の上には舌が載せられる。上下顎の臼歯は、右側面は当初のものであるが、左側面は後補。臼歯は矩形で、歯数を区切る刻線は施されていない。

(6)頬鬚 [図6-8・9]

〈右頬鬚〉は、口端口唇の後方に14枚段彫りする。その下端は下顎の付け根から発し、上端は耳の付け根から発する。先端は欠損するが、輪郭からすると後頭部表面よりかなり突出していたようである。〈左頬鬚〉は口唇に接する部分のみを残して破損する。

(7)顎鬚 [図6-5]

顎鬚は下顎前面の下部から発し、幅をわずかに絞ったのち、前胸部にいたって2段4条に分かれて広がる。顎鬚と喉元との間は彫り抜く。

下顎正面右側や顎鬚のかなりの部分が補修されている。

(8)頭部体毛 [図6-10]

〈右側面〉の後頭部には、右角の長細い痕跡の下と頬鬚先端との間に1本(①)、頸背上部と頬鬚の下端との間に1本(②)、頸の付け根に1本(③)の計3本の体毛がある。体毛①は短く、並行の刻線により3本の平状毛筋をつくり、毛先は反転せず、1本ずつ丸くし、輪郭内部に刻線を入れる。体毛②は簡略な線刻で先端の丸い輪郭をつくり、その内部に2本の刻線を施す。〈左側面〉は風化、剥落のため判然としない。

3) 頸部 [図6-10]

〈右側面〉では、頸背中央から頸側肩口にかけて上向きにのびる体毛③をつくる。体毛は簡単な刻線により5枚の平状毛筋をつくる。毛先は風化するが、最上部の毛筋は、先端を反転し、半巻きとなる。〈左側面〉は風化、剥落のため判然としない。

4) 前胸部 [図6-11]

下顎中央からのびてきた顎鬚が上下2段、左右4条に分かれて広がる。

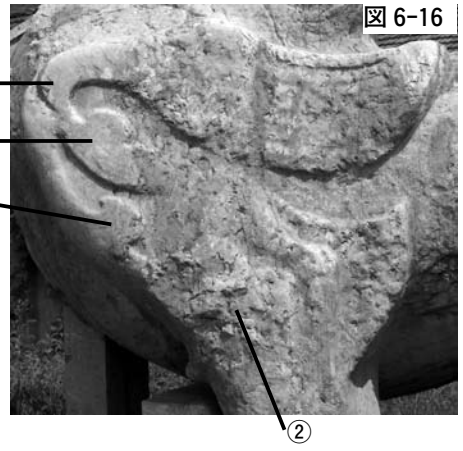
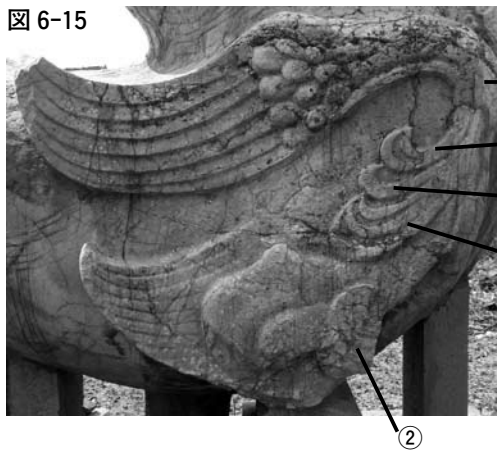
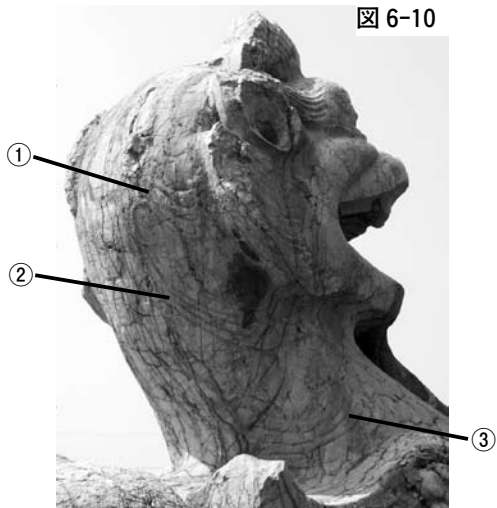
〈右側面〉の上下2本(①・②)は、それぞれがさらに2つに分岐する(①-a・b・②-a・b)。①・②ともに刻線により3本の平状毛筋をつくる。①-a・②-aの体毛の先端は、上方に反転し半C字形をつくる。①-b・②-bの先端は上方に反転し1回転半の渦を巻く。

〈左側面〉の体毛2本(③・④)は、右側面の①・②とは異なり、分岐せず、上方③の体毛は並行する細い刻線により6本の、下方④の体毛は同様に5本の平状毛筋をつくる。いずれの毛先も、上部の先端が反転し上方にはねる。

5) 脚部 [図6-12・13・14]

右前脚は前腕部以下、左前脚は脚先を欠損する。左右後脚は飛節より下を欠損する。右前脚の膝の角度から判断すれば、右脚を前に踏み出していたと思われる。〈左右前脚〉の肘を挟んで上下に三角形の長毛をつくる。

〈右前脚〉長毛は大きく、肘後に水平にのび、



下部輪郭は30度ほどの角度で上方へあがっていき、先端は真上にはねる。刻線により10本程度の平状毛筋をつくる。毛筋は並行で集束しないが、毛先にいたるにしたがい、わずかずつ上方へカーブを描く。〈左前脚〉長毛は小さく、短い。表面は風化する。

同様であるが、ため毛筋は判然としない。〈左右後脚〉には、肘の後方に小さな長毛が申し訳程度に彫られる。〈右後脚〉長毛は6本の段状毛筋をつくる。〈左後脚〉は風化のため、刻線は確認できない。

6) 上腕部〔図6-15・16〕

〈右上腕部〉では、帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのびるが①、先端は欠損する。先端が分岐して体側にのびた体毛の一部が残る②。②の毛先は輪郭の真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分けられ、上方の先端は肩端に向かって半C字形に反転する。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって同一個所から3つに分岐する③～⑤。③～⑤の体毛はいずれも先端を前方に向かって半C字形に反転する。④は1本の平彫りであるが、③は内部をひとつの三日月形に、⑤はふたつの三日月形に刳り貫き、太い輪郭線を残す。

〈左上腕部〉も同様の体毛構成であるが、体毛①の先端部で分岐する②は剥落する。また体毛①は肩口③と先端へいたる部分④の2個所で上腕部のなかに向かって分岐する。③の体毛は、輪郭の真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分ける。④の体毛は矩形の短いもの

で、毛先の上部先端をわずかに前方に反転させる。③、④ともに表面にわずかに毛筋を残すが、風化のためはつきりしない。

7) 翼〔図6-17・18〕

〈右翼〉の基部は上腕部体毛につながる。基部は体毛側より魚鱗状に2・3・4・4個、4列に半球形を並べる。羽は7枚の段彫りで後方にのびる。羽の上下輪郭線は、ほぼ同じ弧を描いて先端にいたる。羽筋は並行にのびるが、羽先にいたるにしたがい、わずかながら集束する部分もある。〈左翼〉も同形と思われるが、表面の風化と剥落により、羽筋や輪郭は明瞭ではない。

8) 腹部〔図6-19・20・21〕

〈右腹側〉には、羽の下部輪郭が先端に向かってカーブする辺りから大腿部中央に1本の体毛がのびる。6本の簡単な線刻によるもので、羽先は前方に反転し、2重に渦を巻く。〈右腹側〉では体毛は確認できない。

下腹には性器（陰囊・陰茎）をつくる。陰茎の先端は欠損する。

9) 背部

脊柱を構成する椎骨が花卉形に盛り上げられ連続する。椎骨と大腿部上部の付け根の間に、数本の体毛の痕跡がかすかかに残るが、風化のため細部は判然としない。

10) 大腿部〔図6-22・23〕

〈右大腿部〉の輪郭部は、幅広い帯状体毛①で覆われる。①の上端は臀部へいたる部分で先端が上下2つに分かれる②。いずれも先端は前方へと反転して半C字形となる。毛

図6-19



図6-20



図6-21



図6-23

筋は風化のため判然としな。①の下端は下腿部で、ひとつは前方に短く反り返り(③)、いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する(④)。また①は②と③の間で大腿部のなかに向かって一本分岐する(⑤)。④の先端は反転し、上方にはねる。並行する刻線により6本の平状毛筋をつくる。⑤の先端は幅が広く、刻線により10本の平状毛筋をつくる。先端の輪郭は真中にひとつ切れ目を入れてふたつに分かれる。分かれた上方の先端は、前方に向かって半C字形に小さく反転する。体毛①は、②から⑤にかけての輪郭部分と、⑤から④にかけての輪郭部分に、1本の刻線が施され、外郭をつくる。〈右大腿部〉は表面の風化と剥落のため、体毛は確

認できない。

11) 臀部〔図6-24〕

〈右臀部〉では、花卉形の椎骨を連ねた脊柱部分より、臀部中央にたく長い体毛が垂れ下がる(①)。①は臀部中央あたりで3本に分岐する(a)~(c)。aは並行する刻線で6本の平状毛筋をつくり、先端はわずかに上方にはねる。cは並行する刻線で5本の縄状毛筋をつくり、後方に向かって渦を巻く。渦の中心は毛筋の中に巻き込む。aとcの間には、3本の毛筋で、先端を上方に反転し半C字形をなす短い体毛(b)がつくられる。体毛①と脊柱の間には、①よりも少し短い体毛②が彫出される。並行する刻線で6本の平状毛筋をつくり、先端は後方に反転し、毛筋の中に一重の渦を巻いて巻き込む。体毛①の付け根には、体毛②との間に小さな渦巻き③をつくる。体毛②の付け根から尾にかけての椎骨の右側には波状に体毛を表し(③)、②の先端あたりで下方に向かって半C字形をなす体毛④をつくる。③は輪郭に沿って1本の刻線を施してあり、この刻線は②の付け根で半C字形を描き(⑤)、体毛④では輪郭内の毛筋となり、さらに欠損した尾へと続く。腰の最頂部より臀部下端までの花卉状椎骨は9個つくられる。〈左臀部〉は表面が風化、剥落し、体表装飾は明確にしがたい。

12) 尾

尾は臀部下端から下の部分が破損する。

7. 三城巷南右石獸

1) 体軀(プロポジション)〔図7-1・2・3・4〕

体長3.02m。④グループ石獸群のなかで、体軀各部分のプロポジションが安定しているのは陵口石獸と三城巷南石獸であるが、後者は前者よりもさらに均斉のとれた、スマートな印象を与える。両者の造形比率(調査報告(1)表2参照)を比べると、縦比はほぼ一致するが、横比において次の3点が相違する。⑰〈胸前一翼前〉が陵口：三城巷南=4：7、⑱翼幅〈翼前一翼後〉が陵口：三城巷南=44：47、⑲〈翼後一

図 6-22

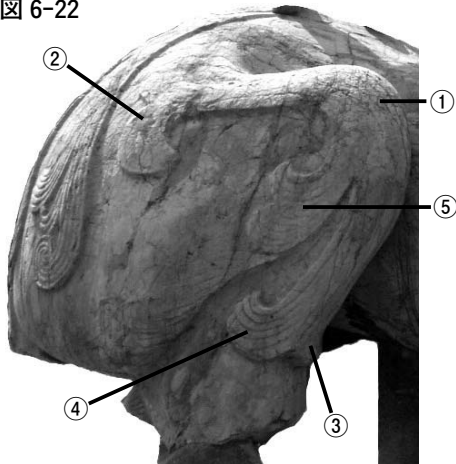
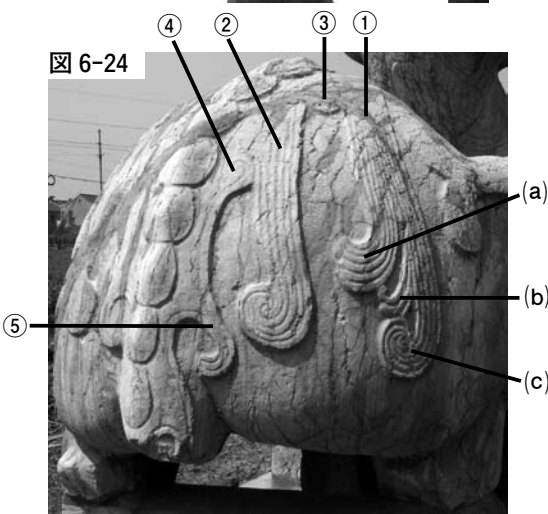


図 6-24



後脚前）が陵口：三城巷南＝11：6となる。これは陵口石獸よりも三城巷南石獸のほうが、胸をゆったりと出し、翼の幅を広く取り、胴部を狭くして前半身と後半身の繋がりをより緊密にしたということである。さらに下腹において、胸下から腰下への上昇が、陵口石獸10に対して三城巷南石獸12であることも、腰がきゅっと絞まったスマートな印象を与える要因となっている。

2) 頭部〔図7-5・7・8〕

頭部はわずかに正面斜め上を向き、口を開く。一角の痕跡が残るが、角は破損する。左側面は上顎と下顎口唇一部、耳上部半分、頬鬚先端が欠損する。右側面は目と眉が破損し、上顎と下顎口唇一部、耳先、頬鬚先端が欠損する。

(1)角〔図7-6〕

両目の間の隆起部より後頭部にいたる頭部中央に1角の痕跡が残る。現状では後頭部痕跡の先端に矩形の小さな穴が穿たれているが、これが当初のものかどうかは判断できない。

(2)目〔図7-5〕

〈右目〉は球体で、瞼や瞳はなく、眼球のみがむき出しにされ、上部から側面にかけてこれを眉が覆う。眼下から上顎にかけて欠損しているため、目の下の輪郭はわかりにくい、円形

ではなく直線的に処理し、目尻が下がる形となる。〈左目〉は破損する。

(3)眉〔図7-7・8〕

〈右眉〉は、眼球の上部と右側面を包み、U字曲線を描いて耳の前までのびる。先端は上に

図7-1



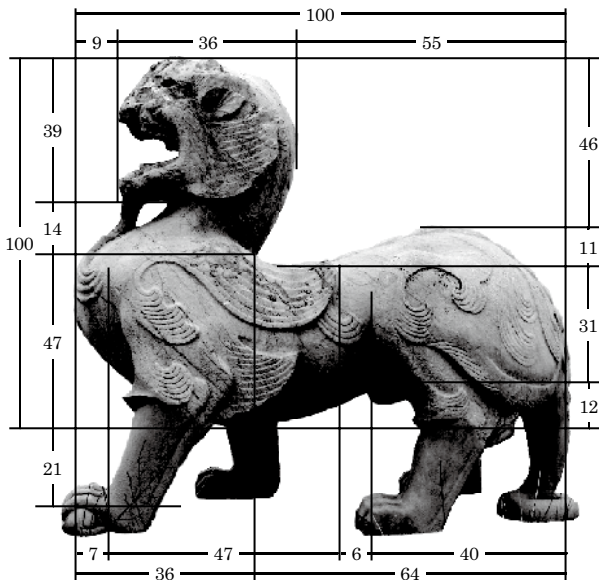
図7-2



図7-3



図7-4



三城巷南右石獸造形比率

图 7-7



图 7-5



图 7-6

图 7-8



图 7-9

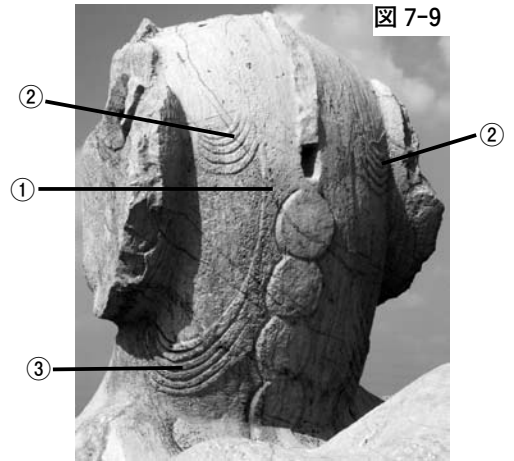


图 7-11



图 7-10

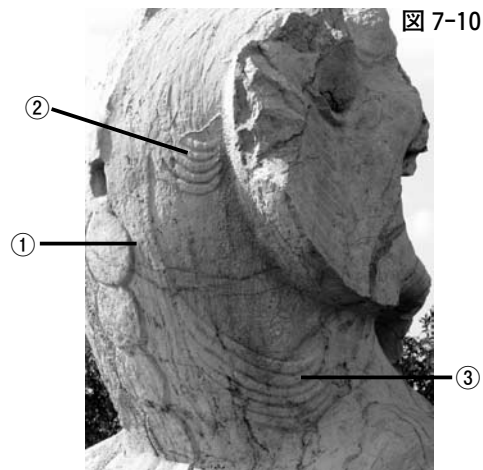


图 7-12



图 7-13

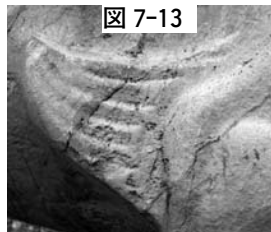


图 7-15



图 7-14



Oct. 2007

南京・丹陽南朝陵墓有角石獸調査報告(2)

はね、盛り上がる。眼球を覆う前方から側面にかけて、輪郭線の内に1本の稜線を盛り上げる。眉の毛筋は表さない。〈左眉〉は破損する。

(4)耳〔図7-7・8〕

〈左耳〉は後方30度に倒した楕円形で、耳介の上部から先端部が欠損する。内部を彫り窪め、耳介の後方部には耳穴の中心より3本の稜線を彫出する。

〈右耳〉は基部と耳穴が残り、耳介は後半分が欠損する。残存する耳介の内部には、風化のため稜線を確認できない。

(5)口吻

(a)鼻〔図7-5〕

鼻の基部と鼻孔の痕跡をのこすのみで、他は破損する。

(b)口唇〔図7-5・7・8〕

口唇は上顎と下顎がひと続きとなるタイプであるが、上顎口唇は左右側面を欠損し、正面中央で鼻下に向かって切れ込む部分のみが残存する。下顎口唇は左右側面で部分的に表面が欠損する。左右口端の口唇は太く盛り上げられる。残存する上下顎や口唇表面には刻線はまったく見られない。

(c)歯〔図7-5・7・8〕

上顎正面口内には、上部を半円形にした門歯を4本線刻する。左右の牙は破損する。左上顎には上部を半円形にした白歯を4本線刻する。左下顎には4本の白歯を矩形に線刻する。右上下顎の白歯は欠損と表面の風化のため判然としない。下顎正面には矩形に線刻した門歯をつくり、その上に舌をおく。

(6)頬髭〔図7-7・8〕

〈左頬髭〉は口端口唇の後方に11枚段彫りする。毛筋は並行線で集束しない。その下端は下顎の付け根から発し、上端は耳の付け根から発する。先端は上方へとカーブする。髭先の位置は、先端表面が欠損するため明確ではないが、後頭部輪郭よりは突出していないようである。〈右頬髭〉も同形であるが、先端部分が欠損する。

(7)顎髭〔図7-5・10〕

下顎前面下部から1本生えだし、いったん逆三角形に絞ったのち、前胸部にいたって3段6条に分かれて広がる。顎髭と喉元との間は彫り抜く。太い刻線を入れて7本の毛筋をつくる。

(8)頭部体毛〔図7-9・10〕

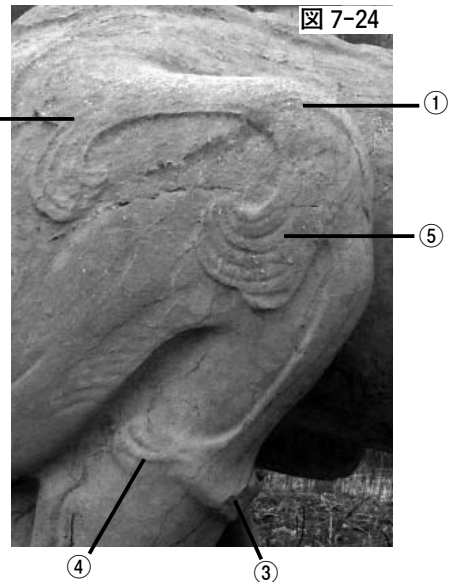
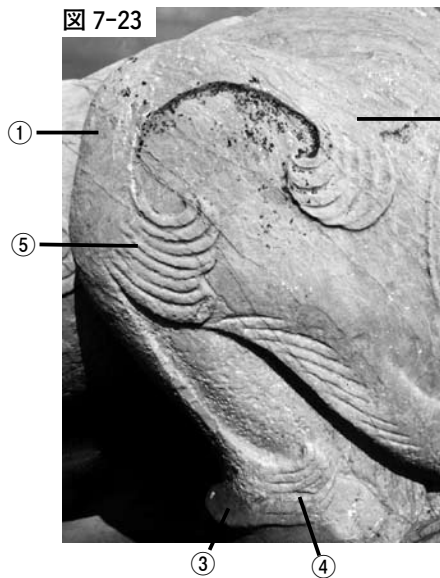
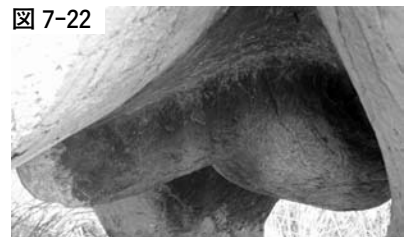
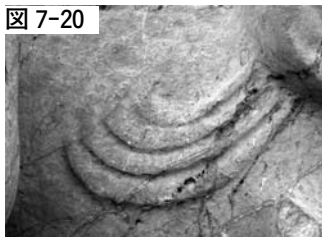
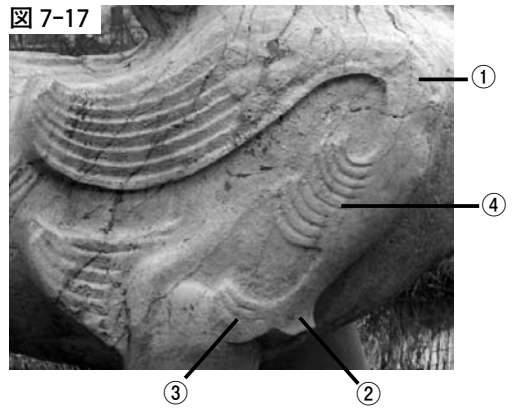
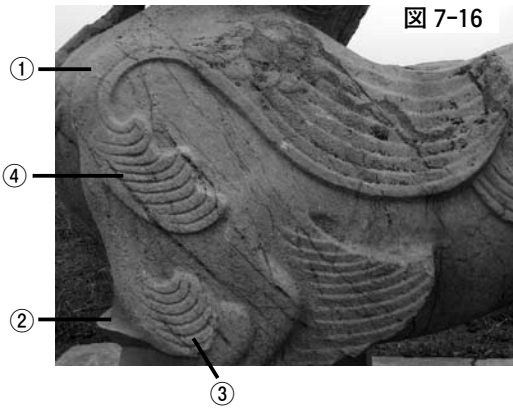
頭頂から後頭部への角跡およびその下方に続く花弁状椎骨には、その両側に沿って帯状で毛筋をつくらない体毛①が彫出される。この①より角跡下端と頬髭の間には左右1本ずつ短い体毛②が表され、①の先端③は頸側にのびて頬髭下部にいたる。②は毛先を若干上方にはね、刻線で5本の平状毛筋をつくり、先端に向かって徐々に集束させる。

3) 頸部〔図7-9・10〕

頸背中央部には角跡下端に穿たれた小穴の下方に4個の花弁状椎骨がつくられる。〈左頸側〉では頭頂より角跡と椎骨に沿ってのびてきた帯状体毛①が、上より3つ目の椎骨の位置でカーブを描き、先端を上方に反転させ頬髭の下へ接するまでのびる。カーブした位置より先には、深く細目の刻線で6本の平状毛筋をつくる。毛筋は先端へと集束していく。〈右頸側〉でも同様であるが、帯状体毛①は上より2つ目の椎骨の位置でカーブを描き、先端はわずかに反転する程度で、頬髭に接するまではのびていない。また6本の平状毛筋をつくるのは〈左頸側〉と同じであるが、毛筋は先端へは集束せず、並行のままである。

4) 前胸部〔図7-11〕

前胸部には、顎髭以外の体毛は見られない。下顎中央からのびてきた顎髭は上下3段左右6条に分かれて広がる。左右ともに、上段と下段の体毛が長く、中段は上下段よりも短い。最上段は左右対称で、毛先は上腕部の輪郭までのび、太い刻線により4本の縄状毛筋をつくる。先端は上にはね、毛筋は集束しない。中段もほぼ左右対称で、基本部分より分岐してすぐに毛先を上方にはねる。太い刻線により3本の縄状毛筋をつくり、毛筋は集束しない。顎髭の先端である最下段は2つに分かれ毛先を上方に反転させる。左右の位置は対象ではなく、向かって



右側の方が左側よりも位置が高い。右側の先端は半C字形になるが、左側は先端を上にはねるにとどまる。いずれも太い刻線により3本の縄状毛筋をつくり、右側の毛筋は集束し、左側は集束しない。

5) 脚部〔図7-12・13・14・15〕

前後脚4本とも体部以下にでる部分は欠損するが、セメントによって補修されている。左前脚の肘以下の角度から判断すると、左脚を前に踏み出していたと思われる。〈左前脚〉の残存部では、肘を頂点として逆くの字形に後側面1/5を一段低く彫り腿を表す。残りの3脚もほぼ同様のつくりで腿を表す。

〈左右前脚〉の肘後には三角形の長毛をつくる。〈左脚長毛〉は完存する。先端は30度程度上方へ向き、12枚の段彫りで毛筋をつくる。毛筋は並行し、先端に集束しない。〈右脚長毛〉も同様であるが、7枚の段彫りで、表面の風化を考慮しても、つくりは粗雑である。〈左右後脚〉では、脚の付け根と臀部下方輪郭との間に短い長毛の一部が残るが、ほとんどは欠損ないし後補となる。

6) 上腕部〔図7-16・17〕

〈左上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび(①)、その先端は2つに分岐する。ひとつは前方に短く反り返るが欠損し(②)、補修されている。いまひとつは体側に沿って後方へと分岐する(③)。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって分岐する(④)。体毛①は④の付け根部分から翼基部にかけて1本の太い刻線をいれて外郭をつくる。体毛①より分岐した③は幅が広く、細い刻線で7本の平状毛筋をつくる。先端は上にはねるが、毛先は集束しない。④の体毛は全体が矩形に近く、毛先を肩口に向け、上部の輪郭は3つの山形になる。細い刻線で10本の並行する平状毛筋をつくる。

〈右上腕部〉の体毛も同様の形式であるが、②の先端は欠損する。③も下方が欠損し、表面は風化のため毛筋も3本程度しか残らない。④の体毛は毛先の輪郭をふた山にし、先端は〈左

上腕部〉よりも強く上方に反転する。刻線で並行する9本の平状毛筋をつくる。

7) 翼〔図7-18・19〕

〈左翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①につながる。基部は円形を魚鱗のように交互に2・3・4・2枚と4列重ねた形状である。羽は4列目の円形から8枚の段彫りで後方にのびる。羽の上部輪郭は基部から浅い弧を描いて上方へとカーブする。羽先の下部輪郭は勢いのあるカーブで先端に上る。羽の各段の稜線は先端にいたるにしたがい集束する。羽の最下段は翼基部の輪郭線、上腕部体毛①の輪郭線となって④の体毛に繋がる。

〈右翼〉も同形であるが、基部は風化のために判然としないが、円形は魚鱗状に2・3・4枚と3列に並ぶようである。羽は7枚の段彫りで、各段の稜線は緩やかな曲線で、先端にいたるにしたがい集束し、上方へとはねる。〈左翼〉と比較し、羽の位置は低い。また羽の最下段は、〈左翼〉と同様に、翼基部の輪郭線、上腕部体毛①の輪郭線となって④の体毛に繋がる。

8) 腹部〔図7-20・21・22〕

〈右側腹〉には羽が羽先へカーブする根元から、1本の体毛が大腿部に向かってのびる。深い刻線により平行な4本の平状毛筋をつくる。毛先は上方にはね、毛筋は先端へと集束しない。〈左腹側〉の同位置にも、同形の体毛が1本彫られる。

下腹には性器(陰囊・陰茎)をつくるが、陰茎の先端が欠損する。

9) 背部

表面は風化のため判然としないが、頸の付け根から脊柱を構成する楕円形の椎骨が尾まで連続する。脊柱を中心として左右側面に、数本の体毛がのびるようであるが明確ではない。

10) 大腿部〔図7-23・24〕

〈左大腿部〉の輪郭部は、幅広い帯状体毛(①)で覆われる。①の上端は臀部へいたる部分で先端が上下2つに分かれる(②)。風化のため表面は判別し難いが、下方は6枚の段彫りで並行する毛筋をつくる。上下いずれも毛先は

前方へと反転してはねる。①の下端は下腿部で、ひとは前方に短く反り返り(③)、いまひとは体側に沿って後方へと短く分岐する(④)。④はほぼ矩形で、細い簡単な刻線で7本の平状毛筋をつくる。毛筋は集束せず、毛先は上方にはねる。③はほぼ破損するが、修復されている。また②と④の間では、大腿部のなかに向かって①より1本の短い体毛が分岐する(⑤)。全体の輪郭はほぼ矩形に近く、毛先の輪郭は2つの山形になる。深い刻線により8本の並行する平状毛筋をつくる。毛筋は上方にカーブし、最上部の先端は反転して半C字形をなす。①の体毛は②から⑤の体毛にいたる輪郭内

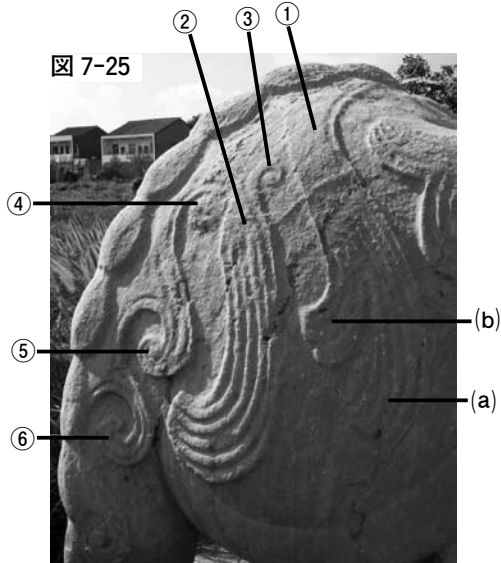


図 7-25

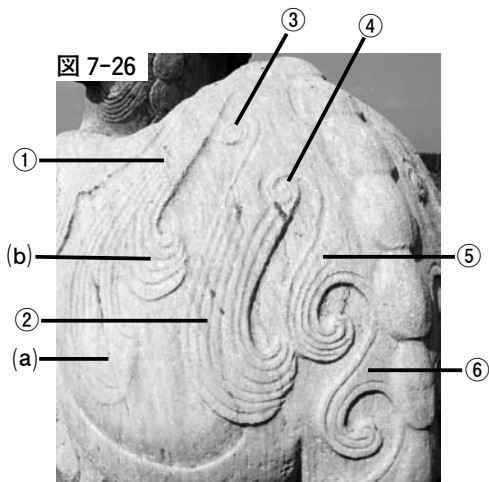


図 7-26

側に1本の刻線を入れるようであるが、風化のため明確ではない。

〈右大腿部〉も同様の体毛構成であるが、③の体毛は先端が欠損し、④の体毛は風化のため3本ほどの毛筋しか残存しない。②の下方体毛は4枚、⑤の体毛は7枚の段彫りとなる。

11) 臀部 [図 7-25・26・27]

〈右臀部〉では、花卉形の椎骨を連ねた脊柱部分より、臀部中央と臀部後方に太く長い体毛が2本垂れ下がる。臀部中央の体毛①の先端は2つに分岐する。前方(a)は浅く太い刻線で5本の並行する縄状毛筋をつくり、先端はわずかに上にはねる。後方(b)は前方(a)よりも短く、風化により毛筋は判然とせず、毛先はわずかに上にはねる。(a)(b)いずれも毛筋は先端へと集束しない。臀部後方の体毛②は、浅く太い刻線で6本の並行する縄状毛筋をつくる。毛先はわずかに上にはね、毛筋は先端にいたるにしたがい徐々に集束する。体毛①と②の付け根の間には、②から前方へのびて下方に一回半渦を巻く巻毛③をつくる。また体毛②の付け根後方にも、同様に後方から前方へのびて下方に一回渦を巻く巻毛④をつくる。

体毛②の付け根部分より下方には、尾椎に沿って下向きに1回転渦を巻く体毛⑤と半C字形をなす体毛⑥が連続する。いずれも浅く太い刻線で、⑤は4本、⑥は3本の、毛先で集束する毛筋をつくる。②の付け根から、⑤⑥にいたる輪郭内部には連続する1本の刻線を入れる。⑥のあたりが臀部の下端となるが、これより〈右



図 7-27

図 7-28

大腿部）中央の体毛あたりまで、甲羅を背負ったように区切られ、その内側に刻線を1本刻んで帯状の区画をつくる。大腿部の帯状区画のなかには細い刻線を7本程度刻んで毛筋としているが、風化のため明確ではない。

〈左臀部〉の体毛構成も同様であるが、毛筋は段彫りに近い。毛筋の本数が〈右臀部〉と異なる。臀部中央の体毛①は10本ほどの並列する段状毛筋をつくり、分岐した体毛は前方(a)が8本、後方(b)が5本の並列する段状毛筋をつくる。臀部後方の体毛②は7本、⑤は5本、⑥は3本並列する段状毛筋をつくるが、段状か平状毛筋か判然としない部分も多い。〈左臀部〉の大腿部帯状区画に刻まれた毛筋は明瞭で、8本を数える。

12) 尾 [図7-28]

尾は臀部体毛⑥の下方2つ目の尾椎あたりから欠損する。現在は台座まで垂直に垂れた尾が、右方向に回転し渦を巻く形で修復されている。

8. 三城巷南左石獸 [図8-1・2・3・4・5]

頭部と後半身を失い、頸部、胸部、腹部前半の骨格しか残っていない。しかも表面は剥落、破損した部分が多く、体表装飾は胸部顎髭、頸背体毛、左翼の羽筋がわずかに残る程度でしかない。

〈前胸部〉の顎髭は上下3段左右5条に分かれて広がる。左右側面にのびた体毛の上段は4

本、中段は3本の縄状毛筋をつくり、すべて先端は反転し上方に半C字形となる。最下段は1本だけが向かって右方向にのびる。4本の縄状毛筋をつくり、先端は石獸を支える台石に隠れるが、最先端部は残っており、反転し、上方に半C字形となる。〈左翼〉の羽中央部には、7本の段彫りが残る。

9. 三城巷北左石獸

1) 体軀(プロポーション) [図9-1・2・3・4]

高さ3.16m。胴の半ばで切断され、頭部、胸部、上腕部、前脚、腹部前半のみが残る。右側面は風化が激しい。

2) 頭部 [図9-5・7・8]

正面やや上方を向いて口を開く。頭部に2本の角をつくるが破損する。左右の耳は破損し、左右顎髭の先端を欠損する。

(1) 角 [図9-5・6・9]

頭頂両目の上方に2本の角をつくる。右角は基部のみを残し破損、左角は立ち上がりから頭頂中央部分までが残る。左角の上表には3つの小さな突起が鋸歯状に並ぶ。側面には鋸歯状突起の下に各4段の丸文が並ぶ。後頭部の角の痕跡は確認し難く、先端の位置や、頭部と密着していたか、分離していたかなどは判断できない。

(2) 目 [図9-5・9]

両目は、これまでの石獸が正面に向いてつくられていたのに対して、正面から側面にかけて

図8-1



図8-2



図8-3



図8-4

奥行きをもって造り出される。このことは彫刻における正面性から側面性へ進展として、造形的には注視すべき点である。眼球を包む部分に

は、これまでの石獣のように毛筋がなく、眉か瞼か即断できない。これが上瞼と下瞼であれば、この点においても造形的な進展を見て取れる。瞼と目の境目は深く彫って眼球を造り出す。目の輪郭は円形ではなく、上部が深い弧を描き、下部が直線的に処理され、目尻を切れ長とする。眼球の中央に円形部分があるようにも見て取れ、黒目を意識した可能性も考えられる。両目の間には目よりも大きな瘤状の隆起をつくる。

図 9-1



図 9-2



図 9-3



図 9-4



図 9-5



図 9-6

①

②

③

(3)眉〔図9-7・8・9〕

左目の目尻には、上瞼と下瞼が接合する部分に毛筋を思わせる刻線がある。右目では目尻の先にわずかに毛筋を思わせるものがある。いずれも眉であるかどうかは明確ではない。あるいは眉を上瞼の縁取りと一体化させ、目尻から毛が生えているようにしているのかもしれない。

(4)耳〔図9-7・8〕

〈右耳〉は基部と彫り窪められた耳穴のみが残り、耳介は破損する。〈左耳〉は耳穴のみ残る。

(5)口吻

(a)鼻〔図9-5〕

鼻は上顎の中央に位置する。鼻先は上顎の先端と同一面にあり、山形に隆起する。底部は口唇に半分埋まり、そこに大きめの円形の鼻孔をふたつ穿つ。鼻梁は両眼の中央に続く。

(b)口唇〔図9-5・7・8〕

口唇はひと続きではなく、上顎と下顎でふたつに分かれる。下顎口唇は、上顎口唇の上に被さるような形となる。上顎正面口唇の下部輪郭線は、両端から緩やかな弧を描いて下がり、鼻下正面中央で上方に切れ込む。口唇内に線刻は施していない。

(c)歯〔図9-5・7・8〕

上顎の口内に矩形的の門歯を彫るが、本数を区分する刻線は見られない。その両端に牙を1本ずつ彫るが、右牙は先端が欠損し付け根部分のみが残る。左牙は完存しており、円柱状の歯茎の上に三角錐の牙を作り出す。下顎にも門歯を彫り、その上に舌が載せられる。舌先の先端は

口から垂れるのではなく、口内におさまる。その両端に犬歯を1本ずつ彫るが、右牙は付け根のみ残る。左牙は上顎の犬歯よりもひとまわり小さく三角錐に作り出す。左右口奥に矩形の臼歯を彫る。本数を区分する刻線は見られない。

(6) 頬髭 [図9-7・8]

両頬髭は口端に隆起した口唇の後につくられる。下端は下顎の付け根から発し、上端は耳の付け根から発する。〈右頬髭〉は先端半分が欠損し、表面が風化するため、付け根の最下部にわずか4枚の段彫りが確認できるのみである。〈左頬髭〉は風化、剥落のため、表面と先端の輪郭が明確ではない。

(7) 顎髭 [図9-5]

顎髭は下顎正面の下部から発し、前胸部にいたって3段6条に分かれて広がる。顎髭と喉元

との間は彫り抜く。

(8) 頭部体毛 [図9-6・11]

〈左右側面〉の後頭部から頸部にかけては、3本の体毛の先端が残る。いずれも風化のため付け根の位置は確認できない。〈左側面〉では頬髭後に①と②の2本、〈右側面〉では頸背から頸側の頬髭下にのびる体毛(③)の1本が見られる。体毛①は3本の毛筋からなり、下2本は先端を丸める蕨手形、上1本は内部に刻線を入れ、先端は上方に反転して半C字形となる。体毛②は太めの刻線で4本の平状毛筋をつくり、毛先は上方に反転して、渦を巻くようであるが、はっきりしない。

3) 頸部 [図9-6・7・8・12]

頸背から右側の頸側にいたる部分には、前項の体毛③が見られる。太い刻線により5枚の平

図9-7



図9-8

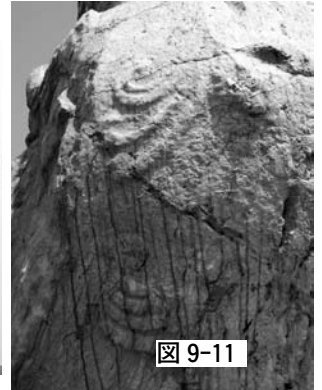


図9-11

図9-9



図9-13

図9-12

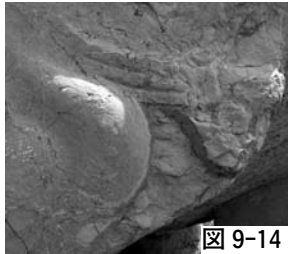


図9-14



図9-10

状毛筋をつくるようであるが、上方の2筋は風化のため明確ではない。その先端も上方に反転して渦を巻く形のようにであるが確認し難い。

左右の頸側には、肩口の翼基部より、1本の体毛がのび上がってくる。いずれも太い刻線により3本の毛筋をつくり、毛先は喉元方向にのびてから後方へとねる。毛筋は先端へと集束する。この位置に、こうした形式の体毛を表す石獣の例は他には見られない。

4) 前胸部 [図9-10]

下顎正面中央からのびてきた顎髭が上下3段左右6条に分かれて広がる。上段の髭は、前胸部にいたるところで左右に分岐する。左右ともに先端は上方にはねる。中段の髭は胸部中央で左右に分岐する。左右ともに先端は上方に反転し、小さな半C字形をつくる。下段の髭は石獣を支える台石の手前で左右に分岐する。左側面の先端は上方に反転し、小さな半C字形をつくり、右側面の先端は上方にはねる。6本いずれの髭も、太い刻線により縄状毛筋をつくる。上段左側面は5本、右側面4本、中段左右とも4

本、下段左側面3本、右側面4本となる。

5) 脚部 [図9-13・14]

前脚は左脚を前に踏み出す。下半身は破損する。左前脚はつま先を上げ、指を5本つくる。親指は欠損する。中指を一番高くして、左右2本を順次低くしていく。右前脚の脚先は破損する。〈左前脚〉では脚の後側に、肘部を頂点として、くの字形に付け根から踵にいたる太い腱を隆起させる。〈右前脚〉は表面が風化する。〈左右前脚〉の肘後には、あまり大きくない三角形の長毛をつくるが、いずれも表面が風化、剥落しており毛筋の状況は明確にしがたい。

6) 上腕部 [図9-15・16]

〈左上腕部〉では、幅広い帯状の体毛が肩端部輪郭を覆って前脚付け根までのび(①)、その先端は2つに分岐する。ひとは前方に短く反り返り(②)、いまひとは体側に沿って後方へと分岐する(③)。また肩端輪郭を覆う体毛①は、途中から上腕部のなかに向かって一本分岐する(④)。反り返る体毛②の前面には、肩端から肘にかけて1本の刻線が刻まれ、その

図9-15



図9-17



図9-16

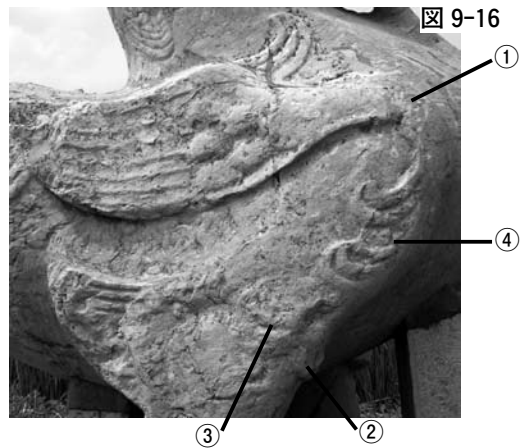


図9-18



先端は上方に巻き込んでいる。体毛③は深い刻線により4本の縄状毛筋をつくる。毛先は上方に反転し、半C字形となり、毛筋は先端へと集束する。体毛④の基底部分は、体毛①より斜め下方向にのび、毛先の輪郭は3つの山をつくる。体毛の長さは上から下へと順次長くなり、輪郭内に太い刻線を刻むことで、上から2、1、3本の毛筋を表す。

〈右上腕部〉は風化のため明瞭ではないが、ほぼ同じ体毛構成となる。①の先端部分となる②と③は風化して痕跡を残すのみ。①より上腕部のなかに向かって分岐する④は、1ヶ所ではなく、2ヶ所に分かれて分岐する。いずれも短い体毛で、先端は上方にはねる。輪郭内に上は1本、下は2本の太い刻線を入れ、2本と3本の毛筋をつくる。毛筋は先端へと集束する。

7) 翼 [図9-17・18]

〈左翼〉の基部は肩口で上腕部体毛①につながる。基部は円形を魚鱗のように2・3枚と2列並べた形状である。粒が大きく立体的である。羽は2列目の円形から9枚の段彫りで後方にのびる。羽の上部輪郭は凹みが浅いが、先端は上方に強くはねる。羽の下部輪郭は勢いのあるカーブで羽先に上る。羽は並列で先端へと集束しない。最先端部の表面は欠損する。〈右翼〉も同形であるが、羽は7枚の段彫りとなる。先端は欠損し、表面が風化する。

8) 腹部

腹部は中ほどより破損するが、左右の腹側には、羽の先端下部輪郭部から斜め下方向にのびる体毛の付け根が残る。

10. 三城巷左石獸

1) 体軀(プロポーション) [図10-1・2・3・4]

体長3.15m 高さ2.18m。三城巷石獸では頭体各部の減り張りもあり、各部分の有機的な結合もなされているが、体部に対して頭部が大きくバランスを欠いた印象を受ける。その原因は、頸の長さと同幅の大きさの不調和である。造形比率を検討してみると（調査報告(I)表2参

照), まず顔の大きさでは, ①面長〈頭頂一顎下〉が他のAグループ石獸と比べてたいした差違がないにもかかわらず, ②面幅〈顎前一面奥〉39は, Aグループ面幅36~37より大きく, さらにBグループ面幅29~35のどれよりも大きくなっている。また頸の長さは, 獅子衝石獸12・陵口石獸15・三城巷南石獸14であるのに対して, 三城巷石獸は23と, 1割近くも長くなっている。また体部では, ④胸高・⑨胴高・⑩腰高の造形比率をみると, Aグループよりいずれ

	Aグループ石獸	三城巷石獸	Bグループ石獸
④胸高〈頸下—胸下〉	46~47	41	41~43
⑨胴高〈背上一胸下〉	43	37	37~40
⑩腰高〈腰上—腰下〉	41~43	35	36~37

図 10-1



図 10-2



三城巷左石獸造形比率

も5%以上小さくなっている。

頸が長くなれば、頭部を小さくしなければ、体部とのバランスは悪くなる。さらに体部の造形比率が小さくなれば、もっと頭部の比率を小さくしなければならない。ところが三城巷石獸では逆に大きくなっているのであるから、そのプロポーションが悪くなるのは当然である。

2) 頭部〔図10-5・7・8〕

正面やや上方を向いて口を開く。2本の角は残存するが、表面は風化する。左目前方、左眉前半は破損し、右目から眉にかけては風化する。また右頬髭下部から先端にかけて破損、風化する。

(1)角〔図10-6・9〕

頭頂両目上方に、目の間の瘤を中心に左右対称に2本の角をつくる。角は円筒形に彫出される。両目の上方からのびた角は、一旦頭部から離れ、後頭部で接する。角の上面には、両角とも後頭部に下ったところに隆起部がある。表面が風化するが、先端部は後頭部中央までのびる。

(2)目〔図10-5〕

〈右目〉は平らな面に円形の眼球を浮彫りにする。〈左目〉の表面は風化のため右目ほど眼球がはっきりしない。両目の間の瘤は目よりも大きく、平らな円形に彫られ、その表面にU字形の刻線を3本施す。

(3)眉〔図10-7・8〕

〈左眉〉は前半分を破損するが、残された後半分の輪郭から判断して、目の右側面を包む形であったと思われる。4枚の段彫りで毛筋をつくり、毛筋はU字曲線を描いて耳の前までのび

る。〈右眉〉は剥落する。

(4)耳〔図10-7・8〕

〈左耳〉は後方45度に倒した楕円形で、付け根に基部をつくり、内部を彫り窪める。耳介の後方部には中心より輪郭部に繋がる2本の稜線を彫り出す。〈右耳〉は剥落して、まったく残らない。

(5)口吻

(a)鼻〔図10-5〕

鼻は上顎の中央で山形につくられる。鼻先は上顎の先端と同一面にあり、底部は口唇に埋まり、そこに大きめの円形の鼻孔をふたつ穿つ。左右とも小鼻の下に刻線をいれて口唇部分と区別する。鼻梁は両眼の中央に続く。

(b)口唇〔図10-5・7・8〕

右側面上顎口唇は剥落するが、上下顎の口唇はひと続きではなく、上顎と下顎でふたつに分かれる。下顎口唇は側面より連続して上顎口唇の上に被さるような形となり、その先端は眼下の鼻梁へとのびる。上顎口唇は鼻の左右で隆起しており、その下部輪郭線は、両端からゆっくりにした曲線で下がり、鼻下正面中央で上方に切れ込む。口唇内に線刻は施していない。

(c)歯〔図10-5・7・8〕

上下顎の口内に門歯を彫るが、風化のため、本数は確認できない。下顎の門歯の上に舌が載せられるが、風化し、痕跡を残すのみである。上下顎両端に牙を1本ずつ彫るが、すべて先端は欠損し、付け根部分のみが残る。上下顎の左右側面口内には矩形の輪郭の中に4本の白歯を彫る。

図10-3



図10-4



図10-5



図10-6

〔6〕**頬髭**〔図10-7・8〕

〈左頬髭〉は左下顎口唇の後方に7枚の段状につくられる。その下端は下顎の付け根から発し、上端は耳の付け根下部から発する。先端は上方へとカーブする。〈右頬髭〉も同形であるが、頬髭下部から先端にかけて表面が剥落する。付け根部分は7枚の段状につくられる。

〔7〕**顎髭**〔図10-5〕

下顎正面からいったん逆三角形に絞つてのび、前胸部にいたって左右対称に3段6条に分かれて広がる。顎髭と喉元との間は彫り抜く。

〔8〕**頭部体表装飾**〔図10-9〕

後頭部から頸付け根にかけて、中央に脊椎を表す楕円形の椎骨が連続して並ぶが、体表装飾は確認できない。

3) **頸部**

頸部にも体表装飾は確認できない。

4) **前胸部**〔図10-10〕

下顎正面中央からのびてきた顎髭が、上下左右対称に3段6条に分かれて広がる。いずれも平彫りで、毛筋を表さない。先端はすべて上方に反転し、渦状に巻き込む。



図 10-7 図 10-8



図 10-9



図 10-10



図 10-11

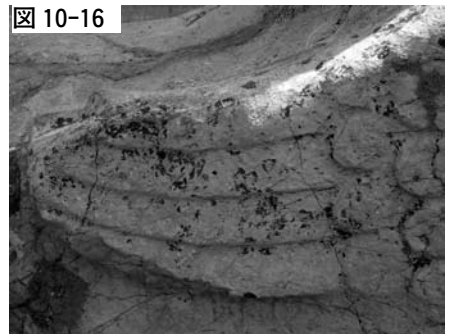


図 10-16



図 10-12



図 10-13

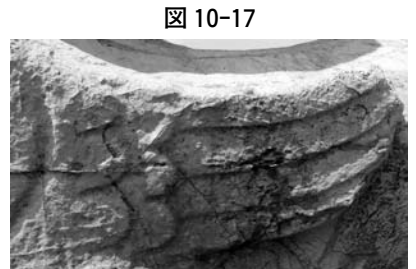


図 10-17

5) 脚部 [図10-11・12・13]

右脚を前に踏み出す。4脚とも脚裏を台座に着け、指は5本、先端に爪をつくる。また4脚とも、脚の正面部分には楕円形に一段彫り下げた区画をつくり、脚の後側部分には、肘部を頂点として、くの字形に付け根から踵にいたるまでを一段彫り窪めて脛を表す。

〈左右前脚〉の肘後上方には三角形の長毛をつくる。左前脚長毛は8枚、右前脚長毛は9枚の段彫りで、いずれも毛筋は並行する。〈右後脚〉では、飛節と臀部下方輪郭との間に7枚の段彫りで長毛を表す。〈左後脚〉の長毛は先端

が欠損し、表面が風化するため、輪郭や毛筋ははっきりしない。

6) 上腕部 [図10-14・15]

〈左上腕部〉全体に渦状の体毛がつくられるが、これは輪郭線を陰刻した1本の体毛である。中央①を始点として、左回りに一回転して上腕部の輪郭と重なり、上腕部正面②の位置より内側にはいって、先端③は前方に反転して半C字形をつくる。これまでの石獣上腕部体毛とはまったく異なる単純な形式のもので、表面が平板にならされている点などを考えると、当初のものではない可能性も考えねばならない。先

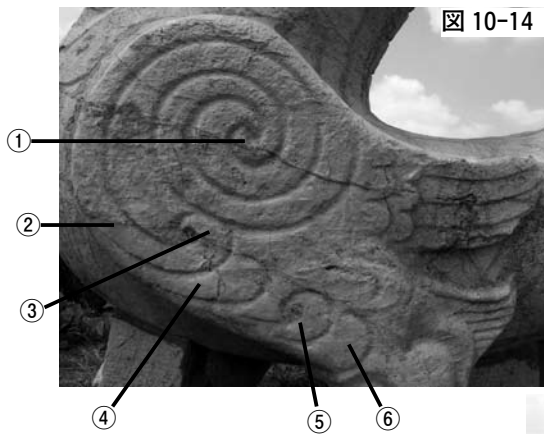


図 10-18



図 10-19



図 10-21



図 10-24



図 10-22



図 10-23

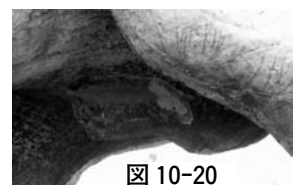


図 10-20

Oct. 2007

南京・丹陽南朝陵墓有角石獸調査報告（2）

端③より前腕部にいたるまでの間には、輪郭線だけを彫った簡単な体毛④～⑥を3つ並べる。

〈右上腕部〉も同様に、中央①を始点として、右回りに渦を巻き、先端②を上方に向けて半C字形につくる。それより下方には③、④ふたつの体毛を簡単に線彫りする。

7) 翼〔図10-16・17〕

〈左翼〉の基部は上腕部渦巻き状体毛の後方、低い位置につくられる。基部は半円形3枚を縦に並べたものを2列に重ねたもので、その先に短い羽を4枚段彫りする。〈右翼〉も同形であるが、基部に縦に並べる半円形は4枚となる。

8) 腹部〔図10-18・19・20〕

〈左側腹〉には、側腹中央あたりに2本の体毛の先端が並ぶ。どちらも平彫りで毛筋は表さず、先端は前方上方に反転し一回転巻き込む。付け根は風化するため、どこから発したかは明らかでない。〈右側腹〉は表面の風化のため体表装飾は不明。下腹には性器（陰囊・陰莖）をつくるが、陰莖の先端は欠損する。

9) 背部〔図10-21〕

脊柱を構成する椎骨が円形に盛り上げられ連続する。

10) 大腿部〔図10-22・23〕

〈右大腿部〉の輪郭部前方には、3本の体毛が等間隔に彫られる。体毛はすべて平彫りで、毛筋は表さず、上部から下部にかけて体毛は長くなる。先端はいずれも上方に反転し一回転巻き込む。この体毛とは別に、右後脚肘前方に、短く反り返る部分をつくる。〈左大腿部〉も同形の体毛が3本彫られるが、最下部の体毛は上2本から少し間を開いた下方に彫られる。

11) 臀部〔図10-24〕

〈右臀部〉では、大腿部後方上部から臀部後方中央にかけて、体毛7本の先端が曲線状に連続して並べられる。すべて平彫りで毛筋は表さず、先端は前方から上方に反転して一回転巻き込む。付け根部分は風化してどこから発したものか明らかでない。〈左臀部〉も同様の構成となる。

12) 尾〔図10-24〕

尾は垂直に垂れて先端が右側に曲がり、台座について右方向に渦を巻く。尾の表面は風化するため、体表装飾は確認できない。

（以下次稿）

〔付 記〕

本調査は平成16～17年度科学研究費補助金基盤研究C「魏晉南北朝時代の環東海地域における南朝文化伝播の諸相と伝播経路に関する基礎研究」（課題番号16520431）により行ったものである。なお本調査報告書の作成にあたっては、多量の画像データの整理および画像修正作業等、多方面にわたって阪南大学国際コミュニケーション学部2002年度生有光恵梨君に協力して頂いた。これら煩雑な作業に労を厭わなかった同君に厚く御礼を申し上げます。

（2007年6月1日受付）